

平成二十九年 六月三〇日発行  
三重大学 日本語学文学第二八号 抜刷

# 目取真俊「眼の奥の森」論

― 集団に内在する暴力と《赦し》 ―

尾  
西  
康  
充

# 目取真俊「眼の奥の森」論

— 集団に内在する暴力と《赦し》 —

## 1

「なぜみんな、これほどおとなしいのか。なぜ父親は、母親は、子供たちの一人ひとりとは、なにひとつ抗議もせずに死んでいくのか」——この言葉を遺したのは、ワルシャワ・ゲットーに収容されたユダヤ人のひとり、エマヌエル・リンゲルブルムであった。少壮歴史家グループのメンバーであった彼は、苛酷な生活を後世に伝えるべく記録を付けていたが、一九四四年三月七日に処刑される。抵抗運動の同志たちは、彼の記録をミルク缶とブリキの箱に収めて、廃墟となったゲットーの地下深くに埋めた。これらは戦後の四六年九月と五〇年一二月の二回にわたって発掘された。当時最大規模であったワルシャワのゲットーは、約四四五〇〇〇人のユダヤ人がわずか三・三六平方キロのなかに押し込められていた。この数字が記録された一九四一年、一年間を通して四万三〇〇〇人が飢餓やチフスによって落命した。リンゲルブルムによれば、「ユダヤ人大衆の

尾西 康 充

消極性という問題」は、ドイツ軍によってあまりにひどいテロルが加えられたために、ユダヤ人がおびえて頭も上げられなくなったことや、密輸によってしたたかに稼ぐユダヤ人がいたことなどに、その原因が求められる。だがもう一つ、民衆が無気力に抑え込まれていたのは、「いかにして人びとを叩きのめし「秩序を維持」させ、労働収容所に送り込むかを習いおぼえたユダヤ人警察」が存在していたからであった。汚職と不正にまみれたユダヤ人評議会がユダヤ人警察官を使って、収容所送りの人数を確保するためにユダヤ人狩りをおこなった。「ユダヤ人をやっつけろ！」と叫ぶ警官すら存在した。人狩りの暴力から逃れるには彼らに賄賂を握ませるしかない。ゲットーですさまじい手入れがおこなわれた数日間、「ユダヤ人評議会の汚辱の日々として永遠に記憶されるだろう。評議会にたいするユダヤ民衆の怒りはたとえようもなかった」という<sup>③</sup>。リンゲルブルムの記録は、評議会議長アダム・チェルニアコフが人びとから「偶像視されている。彼の発する布告に質疑は無用であり、彼の言葉は至上命令なのだ。要するに、指導者原理をとりいれた

のである」と伝えている。<sup>④</sup> こともあるように、チエルニアコフの態度は、ナチス総統の「指導者原理」(Führungsprinzipien)に通じているとさえ揶揄されているのである。

ユダヤ人によるワルシャワ・ゲットー蜂起(一九四三年四～五月)とポーランド人抵抗組織によるワルシャワ蜂起(一九四四年八月～一〇月)では、戦闘員の移動や一般住民の避難を助けるなど、市内に張り巡らされた地下水道が重要な役割を果たした。沖縄でも地下壕が米軍からの攻撃に対する避難場所になった。日本軍から軍民一体の協力を強いられた沖縄戦では、住民相互の監視体制や村社会の統制強化が図られ、苛酷な地上戦に巻き込まれて多数の犠牲者が出た。

「その過剰なまでに協力的な言動は、逆に胡散臭さを感じさせるほど」であった——沖縄戦当時、米兵による少女暴行事件が発生した島で、米兵に報復をおこなった青年を捜索する米軍に、協力を惜しまなかった区長の態度である。目取真俊の「眼の奥の森」(初出は季刊「前夜」二〇〇四年秋号～二〇〇七年夏号、初収は『眼の奥の森』、二〇〇九年五月、影書房)は、少女暴行事件を素材にししながら、人間集団の陰湿な暴力を巧みに描き出している。村の青年を米軍に差し出す指導者、暴力の共有を通じて仲間意識を維持する米兵、米兵に強姦された少女を今度は自分たちで犯す沖縄の男性たち——弱者をおとしめることによって集団が結束している点では、彼らの集団は似通っていたのである。語りの位相が異なる全一〇章の短編から構成された「眼の奥の

森」では、越川芳明氏が指摘するように、「小夜子の強姦という「事実」に関して見解が分かれるわけではなく、「沖縄内部の差異に目が向くような仕掛けがなされている」のである。<sup>⑤</sup> ここで、集団とそこに内在する暴力との関係性について論じてみよう。

## 2

一九九五年九月、沖縄本島北部の商店街で買物をしていた一二歳の女子小学生が三名の米兵に襲われた。日米地位協定によって容疑者が地元警察に引き渡されなかったため、沖縄では激しい抗議運動が起こった。協定の見直しはいうまでもなく、米軍基地の縮小・撤廃を要求するまでに発展した。「眼の奥の森」は、この一〇年後の本島北部の島が舞台とされている。登場人物はことある毎に、一〇年前の事件を思い浮かべると同時に、六〇年前の米兵による少女強姦の光景——「流れ落ちる血」と「乱れた黒い髪」、「森の中に走って消えていく女の最後に発した叫び声」——を脳裡によみがえらせる。そして「ああ、何も変わらない、沖縄は五十年経っても何も変わっていない」と絶望するのであった。

この小説の背景として、「村に侵攻してきた米兵によって村の女性達が襲われる事件が多発」していたことがあげられる。目取真俊は「沖縄戦と慰安所」について、つぎのように説明し

ている。

沖繩戦における慰安婦や慰安所の実態については、まだ未解明のことが多いのが実情です。今帰仁村にも戦争中に慰安所が置かれています。当初は仲宗根区にあった宮城医院に置かれ、料亭で働いていた沖繩人女性が日本兵の相手をさせられています。そこにいた女性達は、日本軍が山中に敗走したあと、今度は米軍を相手にさせられています。村に侵攻してきた米兵によって村の女性達が襲われる事件が多発し、その「対策」のために村のリーダーと米軍が相談して、新たな慰安所を民家を利用して作っています。その時中心となったなかに、慰安所に女性を斡旋していた旅館の主人と、当時警防団長をしていた私の祖父もいたとい<sup>6</sup>います。

沖繩の女性たちには、戦闘状態にある日本兵と米兵との双方から性暴力を受けた歴史が存する。戦場では、国家や民族間の敵対関係もさることながら、女性<sup>7</sup>は男性によって蹂躪されるというジェンダー差別がひとときわ明瞭になるのである。

「眼の奥の森」が作品の素材としている少女暴行事件は、沖繩戦で米軍に制圧された本島北部の島が舞台である。収容所に集められていた村民たちは、米兵から食糧を配給され、怪我や病氣も治療してもらってから解放されて村に戻ってくる。当初抱いていた恐怖が弛みはじめたその矢先に衝撃的な事件が起こる。五人の少女が浅瀬で貝採りをしていた。ヒサコとフミ、タ

ミコ、フジコの四人は国民学校四年生の一〇歳、もう一人はタミコの姉小夜子で一七歳であった。対岸に造られた仮設の港で作業をしていた四人の米兵が二〇〇メートルほどの距離を泳いで渡る。彼らによって小夜子がアダン<sup>8</sup>の森の茂みの奥で強姦された。翌日、村民が警戒しているところに、同じ四人を含む五人の米兵がジープに乗って村に現れる。二人の米兵がライフル銃を構えて男たちを威嚇する間、残りの三人は家の戸を蹴破って、男たちが見ている前で「二人の若い女性に乱暴を働く。それから四日間彼らは現れなかったが、再び四人の米兵がこちらに泳いで来ようとする」と、鉾<sup>9</sup>を手にした盛治が海に飛び込む。小夜子の隣家に住んでいた彼は一七歳、一人の腹を刺し、もう一人の肩を刺した。いずれも致命傷には至らなかった。半時間ほど経って二〇人以上の米兵が数台のジープや小型トラックに分乗して現れる。盛治は手榴弾を持って洞窟<sup>10</sup>に隠れていたが、区長の嘉陽の呼びかけに応じず、催涙ガスを投げられる。この一連のできごとのなかで、重要なカギを握るのが嘉陽である。潜伏している盛治の姿を偶然見かけた村民が、米軍からの盗品と引き換えに嘉陽に彼の潜伏場所を話す。二十代半ばの日系人通訳の兵士ロバート・比嘉に、彼は盛治の居場所を「媚びるように笑」いながら密告した。「半分得意な気持ちと、もう半分は後ろめたさとも疚しさともつかない気持ち」を抱えつつも、自分が処罰されるかもしれないことを恐れて、「盛治が洞窟の中にいることを祈りながら」案内した。第二章におい

て、市教育委員会の臨時職員の眞喜屋めぐみからインタビューを受ける嘉陽が、小説の語り手によって「お前」と呼ばれて登場していることは、村民から反感を持たれ白眼視されていたことを示している。嘉陽は、戦争中は防衛隊長を務めて「人一倍アメリカ人への憎悪を口にしていた」にもかかわらず、収容所では「要領よく立ち回って」米軍の物資配給係になっていた。彼にしてみれば、自分が米軍にうまく交渉したおかげで他の村よりも多く食糧を配給してもらえた。米兵を刺して村に迷惑をかけた盛治が誉められ、自分が悪者扱いされるのは納得がゆかない。森の坂道を下ってゆく間、嘉陽めがけて石が投げられる。彼によれば、「アメリカ人達に協力したのが悪いみたいに言うが、お前達も山狩りに参加しておったのではないか……」という。

嘉陽はめぐみの取材を終えた後、「我が死んでも、私の声は残り、あのときは伝えられていく」と思う一方で、「何も伝えることはできなかった、私の思い出は我とともに消えていくさ……」と感慨にふける。しかし嘉陽が語った事件の内容は、彼の視点から語られる自己弁解ではない。

嘉陽は作品最後の第一〇章にも登場する。その章では、後年、沖縄県から顕彰される通知を受けたロバート・比嘉が事件を回想しながら、小夜子と盛治に対する罪の意識を告白し、候補を辞退する。彼によれば、事件直後盛治のことを訊ねると、嘉陽の表情は「恐怖と反撥、その二つを隠そうとして浮かんで

くる卑屈な笑い」を浮かべる。ロバートにしてみれば、彼の故郷である沖縄の人がそのような表情をするのは「見ていて辛いもの」があり、しかも「それに動揺している自分が苛立たしく、区長への怒りが募った」。だが松田カナによって事件の真相が明かされた後は、嘉陽は一転して「饒舌にさえなつて」語りはじめる。ロバートによれば、「盛治という若者を捕らえるために山狩りをする事態にまでなつていながら、私達を欺いていた区長に、怒りを抑えかねていました。少尉の指示が穏便すぎるのが意外で、この男に重い罰を与えるべきだと考えていました」という。だが沖縄に限らず日本人の態度には共通するものがあつたのではないか——山崎豊子の『二つの祖国』（第二章ニッポン）には、原爆の被害を受けた住民のなかで「米軍及び米国人に対する憎悪」を示したのは二パーセントにすぎなかったことが紹介されている。米国戦略爆撃調査団の報告書『原子爆弾を受けた地区の住民の反応』によれば、「われわれ調査団の予測した数値より遙かに低いのは、多くの日本人が、占領軍に対する恐怖、または追従から、インタビューした米将兵に対し、率直な気持を表明しなかったことは明らかである」という（『二つの祖国』第二巻、二〇〇九年九月、新潮文庫、五四五頁）——残念ながらアメリカに対する恐怖と追従は、沖縄を犠牲にして米軍基地を存続させている今日の日本政府にも継承されている。

米兵に立ち向かった盛治は、米軍からみれば「一人で米軍に向かつていったクレイジーでカミカゼな若者」でしかなかった。だが盛治は「自分の部落の女子がやられてるのに、どうして黙って見てばかりいて止めないか、どうして……」と思う。そして「アメリカが上陸する前は勇ましいことを言っていたくせに呆気なく投降した日本の兵隊どもも、自分達の島の女子が乱暴されて何も抵抗しきらん部落の男達も、ふぐりを抜かれた犬ころの如きものである」と憤慨する。自分は彼らとはちがつて、「腐れアメリカ達」を一人でも多く殺したいと決意している。米軍に協力して山狩りをおこなうのをみて、小夜子が暴行された現場にいたフミは、「村の男達がイヤでイヤでたまらなかった」という。「あの時代は抵抗したら殺されたんだから、仕方がないと言えばそれまでだけとね、彼らは「盛治のために自分達が勇気がないのはつきりさせられて、恥をかかされたと思つて腹が立つていたのかね」と推測する。米兵の前では村の男たちの自尊心が通用しないことが、盛治の勇氣ある行動によって明らかにされたのである。しかもその自尊心とは村の女性を専有しているという支配欲によって構成されている。暴行された小夜子の人格的かつ身体的な補償を米兵に求めようというのではなく、支配が侵犯されても報復できない男

たちの無力さを暴露した盛治への腹いせをおこなおうとしたのである。村の男たちは、米兵に密告した嘉陽に石を投げたが、フミによれば、「部落の人達に石を投げる資格があったのかね……」という。疚しさを抱く彼らもまた米兵の共犯者である。やがて小夜子は妊娠する。小夜子の父親は、被害者である娘をかばうどころか、「アメリカの子どもを産むくらいなら死ね」と詰責する。実際に小夜子は何度も死のうとした。そして島の女たちのなかにも、日頃から小夜子を「妬んでいた」という「同じ部落の同級生」のように、小夜子の痛みに共感しようとしぬ者がいたのである。

## 4

盛治が国民学校五年生の秋、山羊に与える草を刈っていると、三人の友人から性的な暴力を受ける。数名の女子生徒——そのなかには小夜子も含まれていた——に現場を目撃されてしまう。「足を広げられて犬のように赤く剥けた性器をさらした自分の姿を見る小夜子の眼差しを思い出すと、三人への怒りよりも自分への醜さへの嫌悪がこみ上げ、もう二度と小夜子の目に自分の姿を映さないようにしたいとさえ思った」。加害者に向けられるべき非難が自己に向けられ、嫌悪や羞恥の念が深く内攻し、自分の内面の感情を外に向けて発する言葉が使えなくなる。言葉が不自由であつた盛治は、標準語も話せないため

に、鉄血勤皇隊として動員された友人から、「我、我つてお前は犬か？ 早く標準語を覚えろよ、日本人なんだから……」と馬鹿にされる。だが防衛隊の一員として「天皇陛下のために」生命を捧げることを決意し、「死んだ後に、あの男は不言実行の大和男子だった、と言われることを願った」という。集団の周縁に位置づけられた者ほど、中心への同化意識を強く持とうとするのである。

催涙ガスによつて洞窟からいぶり出された盛治は、持つていた手榴弾が不発に終わり、銃撃されて倒れる。米軍に捕らえられ、日本軍の関与があつた疑いから、苛酷な拷問をとまなう尋問がおこなわれる。しばらく経つてから村に戻ってくるが、失明していた。弟が継いだ家に小屋を建てて住む。島の女の子に悪戯をするという噂を立てられ、盛治は厄介者扱いされる。公民館のガジマルの下でサンシンを弾く姿は、「ヤマトウの記者」によつて「沖繩戦の悲劇を歌い続ける老人」と報じられた。島では、日本軍のスパイであつたとも、米軍のスパイであつたとも噂された。盛治は「悪事をやつたのは、アメリカだけではないなかつた」ことを明かす。「手を押さえる……、暴れるな、アメリカにはさせて、我達にはさせんのか……」と強姦の光景を再現し、「その話を聞いたときから、私の頭は本当におかしくなつたままやさ……」という。実際、小夜子は米兵ではなく「隣部落の男達」の子ども——彼女の父親によれば「島の犬畜生達の子」——を産んだのであつた。

他方、事件のあつた後、家に閉じこもつたままの小夜子は「狂者」になつてしまう。「丸裸」で家から出てくると「部落の男達」は笑いながら指笛を吹いて囃し立てる。着物を手にして彼女を追いかける母親を助けるふりをして触ろうとすると、小夜子は泣きわめいて暴れる。それを目撃したフミは「島の青年達もアメリカ達とまったく同じだと思つたさ」という。騒動が起これと棒を手にした盛治が大声を上げて彼らを殴ろうとするのだが、目が不自由なために、逆に「悪戯」され、棒を取り上げられていつも叩き伏せられていた。小夜子は本島中南部の病院に入院させられ、出産して一カ月経つと子供は里子に出される。彼女と彼女の家族は島から出て、南部のある町で暮らす。「島の人達のぬめぬめとした眼差しや囁き声」は耳にこびりついて離れなかつたからである。

小夜子は精神科の治療施設に一〇年以上過ごした後、介護施設に入居する。四人部屋の枕元の壁には、彼女がクレヨンで書いた三枚の絵が貼られていた。「どれも重く暗い色調で、濃い緑や青、紫が何度も塗り重ねられ、深い森の奥のようだった」。一番明るい感じのする右側の絵は、若草色や黄色が所々に使われ、真つ黒に塗りつぶされた穴が真ん中から右寄りに描かれていた。左側の絵は最も暗い色調で、濃い緑や紫、群青、焦げ茶や黒の線で覆いつくされ、濃い赤のクレヨンで塗られた円が真ん中から左上にあつた。「森の闇に、夕日みたいに赤いアダンの実が浮かんでいた……」。これら二枚の下に貼られた絵は、



最近描かれたもので、緑や紫を塗り重ねた暗い森のうえに、二センチ幅くらいの青い線が水平に塗られている。右下には茶色のクレヨンで「二つの奇妙な形」——「二人の人が寄り添うようにしてうずくまっている」姿——が描かれている。

三枚の絵に共通する「深い森の奥」の色調とは、小夜子が強姦されたアダンの茂みの森であろう。彼女の眼の奥にはその森の残影が遺存していたのである。右側の絵は、恐怖や不安などの強い感情を抑え込むためにかなりの心理的負荷がかかっていることを、執拗に黒く塗られた穴が示している。だが未来の明るさも多少感じられている。左側の絵は、攻撃され脅威がもたらされていることをアダンの実を象徴する赤い円が示し、絶望に満ちた過去の暗さが感じられる。《黒い太陽》は、自殺企図をしたり容態が急変したりする要注意のサインとされ、統合失調症の病態の極期にみられる描画である<sup>⑦</sup>。

二枚の下絵は、水平線のこちら側に打ちひしがれた二人の人間が描かれている。盛治がウチナーグチで語る第五章の最後に「我が声<sup>こゝろ</sup>が、聞こえるか、小夜子……」というセリフがある。海に向かって発せられたその言葉に応じるかのように、第八章の最後で小夜子も「聞こえるよ、セイジ」と海に向かっていう。実際の盛治と小夜子は、海にへだてられた場所で生活しているが、《傷ついた魂の交感》を通じて、小夜子には寄り添って生きているかのように感じられている。青い水平線は抑制と沈潜を表しており、小夜子の精神が最近わずかながらも回復に向か

いはじめたといえよう。

## 5

「眼の奥の森」における心理分析が卓越しているのは、第八章である。その章は、学校のロングホームルームの時間に沖繩戦の体験を聴いた女子中学生の視点で語られる。「私」の周囲に現れる「\*\*」と匿名で呼ばれる人びとは、実際に「私」をいじめる加害者であり、また強迫神経症が昂じて妄想された支配者のイメージでもある。陰湿ないじめの描写は、読者の胸を締めつける。タミコによる四〇分の講話の途中、生徒たちの間で私語が飛び交うようになる。生徒たちにとって、言葉が聞きづらかったり、何度か詰まって沈黙が続いたりしたことに加えて、そもそもその話に実感がわかなかったのである。体験を語るタミコが「ごめんなさいね、私の話が下手だから、みなさんを退屈させたみたいだね……」といって「本当にすまなさそうな表情」を浮かべる場面がある。

相反する行動指標のなかで被害者が追い詰められてゆく、いじめのプロセスが巧みに描写されている。たとえば加害者が「まじめにしている」と命令しながら、「あいつはまじめぶっている」と陰口をたたく。被害者は悪意を持っていないのに「悪いことしても謝らないから嫌われるんだよ」といわれ、加害者は悪意に満ちているにもかかわらず「みんなあなたのことを



思つて注意しているのに」「親切にしても話をねじ曲げて先生に告げ口をするんだから」と非難する。唾の入ったオレンジジュースを渡され、「みんなの友情が入っているからね」「遠慮しないで飲んで」といつて無理に飲まされた「私」は、たまらずに嘔吐する。周囲から「みんなあんたのこと心配してるんだよ」「あーあ、せっかく人が親切にしてあげたのに」とからかわれる。「私」は教員に真実を告げることができないまま、「何があつたか言つたら赦さないからね、分かっているよね」と友人から脅されて保健室に向かう。クラス担任には、いじめを打ち明けるどころか、自分をいじめた友人にお礼をいつてほしいという伝言を依頼する。いじめの心理は、現代日本の社会病理であるのみならず、時代や場所をこえて、人間の集団にみられる支配と抑圧の構造であると考えられる。

「眼の森の奥」では、小夜子を強姦した米兵の心理を説明した部分にも巧みな心理分析がみられる。盛治に銛で刺された米兵は、身体から摘出した銛の切っ先を用いた手製のペンダントを終生身に付けていた。彼以外の米兵が本島南部へ転戦して戦死したことを考えれば、銛で傷つけられたことによって命拾ひをしたことになる。少女暴行事件のはじめは「抵抗感」があつたが、小夜子を強姦する米兵から「お前は俺たちの本当の仲間か?」と詰め寄られるように感じ犯行に加わる。負傷して野戦病院に入院するが、軍医や衛生兵から軽蔑されているような気がするし、傷病兵として本国送還になつても、家族や故郷の人

びとは真相を知らせるわけにはいかない。彼は、暴力をふるうことが男らしきであるという価値観を共有する男性集団から疎外されてしまうことの不安——暴力に加わらないことで卑怯者であると噂されることの恥ずかしさによっていつも胸がふさがれているのである。

アメリカに帰国してからの彼は、「いつも酒の臭いがして、不機嫌に黙り込んで居間のテレビを見ているか、部屋にこもっていることが多かったらしい」。運転していた車が崖から転落して五〇代で死亡した。本当に事故だったのか、もしかすると沖繩の戦場で何かあつたのではないかとさえ、疑われるような事故であつた。盛治の手にした手榴弾は不発に終わったが、手榴弾に似た形を持つアダンの実は、「私」の内面で炸裂し、痛みの塊として摘出されないうまま脇腹に残っていたのである。

ペンダントを受け継いだ孫のJは、祖父の体験を沖繩で調査し、ペンダントを沖繩の海に沈めたいと考えていた。だが9・11によつてビルの倒壊に巻き込まれて死亡した。沖繩の小説家「私」は、大学時代の友人Mを通じて、Jの依頼を引き受ける。

最後に少しか付け加えておきたいことがあつて、Jの死は残念だけど、俺には9・11のあの事件が、やはり完全には否定できないんだな。無差別テロはいけないとか、暴力の連鎖は許されないとか、そんなきれいな事を言つてもしょうがないだろうという気がしてね。日本という豊かな国に住んでいて、アメリカさんに頼つて平和を享受してい

る俺たちが何を言ったって、世界中のあちこちで第二、第三の9・11を起こそうと狙っている連中には何の意味もないだろう。

もし意味のあることを言える奴が日本にいたるとすれば、六十年前に米兵を刺した島の男じゃないか……。

右の引用には、戦後日本の平和を維持させた憲法第九条の陰に、沖繩に米軍基地を押しつけてきたことに対する目取真の異議申し立てがある。彼によれば、「本土」の人間は沖繩の基地問題に対して「無関心」である。「関心がないから踏んでいることに気づきさえしない。踏まれている者の痛みにも気づかない者には、足を刺すしかない。そのうちそういう考えも生まれるんじゃないですか」という。沖繩戦で、そして日米安保で、有事法制で「捨て石」にされ続ける沖繩の怒りを盛治は体現している。ただし盛治は、ウチナーのなかでも孤立している。多くの者たちは、米兵に協力して山狩りをおこない、女性を自分たちの専有物としか考えない輩である。まさに「島の青年達もアメリカ達とまったく同じ」なのである。

さらに目取真は、「非武の思想」を受け継いでいる沖繩が「癒しの島」とされている幻想を打ち砕こうとした。コザ暴動のような事件が発生したのは、「正当な裁判を行って、司法手続きをとって、米兵Ⅱ加害者を裁くことができない」という社会的背景が存するからである。「戦後の民主主義的なイデオロギー」のなかで社会一般に「暴力はいけなかつた価値観」が強

調された。その余波を受けて「昔から「非武の思想」を持ったおとなしい人たちの集団」であるかのようなイメージが持たれ、「沖繩の抵抗した歴史」が隠されてきた。しかし目取真は、「沖繩人の感情や意志」を語り継いできた「記憶の力」を今いちど評価し、ウチナンチューによる抵抗の歴史をよみがえらせようとするのである。「あの狂人がいらんことをやりくさって、いったい何を考えていおつたか……」と嘉陽から吐き捨てられたように、盛治の行動は、村民一般からすると狂気の沙汰であつたかもしれない。だがそれは相手に恐怖と追従を抱いている集団の視点からは狂気とみえるだけで、男たちの暴力によって「狂者」にされた小夜子の尊厳を取り戻すための孤絶の試みであつたのである。

## 6

最後に問題提起を一つしておきたい。「眼の奥の森」には被害者のみならず加害者の心理が描かれていたが、非道な暴力をふるつた加害者の心理を知る必要があるのだろうか——と。アウシュヴィッツから帰還したブリーモ・レーヴィは、ユダヤ人のシヨーアを引き起こした「ヒトラーとその背後にあつた、ドイツのすさまじい反ユダヤ主義」に関して、いかなる心理的説明も納得ゆかないとする。

おそらくあつた出来事は理解できないもの、理解して

はいけないものなのだろう。なぜなら、「理解する」とは、「認める」に似た行為だからだ。つまり、ある人の意図や行為を「理解する」とは、語源的に見ても、その行為や意図を包みこみ、その実行者を包みこみ、自らをその位置に置き、その実行者と同一化することを意味する。ところが、普通の人はだれ一人として、ヒットラー、ヒムラー、ゲッペルス、アイヒマン、といったものたちとの同一化ができない。この事実は私たちをとまどわせると同時に安心させもする。というのは、彼らの言葉が（残念ながら彼らの行為も）理解できないことが、おそらく望ましいからだ。<sup>10)</sup>

レーヴィによれば、暴力の加害者の心理を理解しようとしてはならない、なぜならそれは彼に同化してしまう可能性を開くからであるという。私はこの言葉に思い当たることがある。二〇一六年十一月、アウシュヴィッツ強制収容所を見学した。一号棟地下の拷問部屋や、一〇号棟との間にある銃殺刑を執行するための「死の壁」など、凄惨な現場の遺構をみたとき、犠牲になったユダヤ人の絶望的な心理はもとより、どれほど残忍になればこのような暴力が可能になるのか、とナチス親衛隊員の心理を推測しようとした。現地ガイドの中谷剛氏——日本人として唯一の公式解説員——にそのことを話すと、「その必要はない、なぜなら当時のドイツ人に同化してしまうから」という言葉が返ってきた。たしかに、非理性の極みに至った暴力に対しては《否》と拒絶するしかないのだろう。

一九六三年一月二月、フランクフルト陪審裁判所でアウシュヴィッツ強制収容所の関係者に対する公判が開廷された。生存者二一人が証言し、最終的に起訴された二〇人の被告のうち、謀殺罪の正犯あるいは共同正犯によって六人が終身刑、一人に最長一四年の懲役刑という判決が下された。証拠不十分で三人は無罪であった。検事総長フリッツ・パウアーは、被告のうちだれ一人として「人間的な言葉」を口にしたものはない、それを期待することもできなかったことを明かしている。悔悛の素振りすらみせない彼らに対しては、やはり《否》というほかない。

アウシュヴィッツと沖繩を同列に論じるのは早計かも知れない。だが、それらの悲劇の根底に民族差別があったことは否めない。第二次大戦前ヨーロッパにいたユダヤ人九〇〇万人のうちナチスによって約六〇〇万人が虐殺された。沖繩戦では県民五九万人のうち一二万人以上が帝国日本の捨て石とされて死亡したのである。組織的なシヨアーであれ個別的な虐待や性暴力であれ、この圧倒的な死亡率を前にすれば、戦争のいかなる暴力にも見過ごすことができなくなるのは当然である。武器を持つだけで人間は変わるというエピソードを目取真は父親から聞いていた。沖繩戦で県立第三中学校から動員され鉄血勤皇隊に属していた父親が、日本兵とともに山中を移動していたとき、山羊を連れた老人と遭遇する。銃を突き付けて山羊を略奪したが、もしその老人が渡さないようであれば「間違いない撃ち殺

していた」という。<sup>12)</sup>「武器を手に入れば、村の少年達もそう変わっていく」ことをみれば、「いざ戦争になったとき、軍隊が自分を守ってくれるという幻想は、私には微塵もありません」と断言するのである。<sup>13)</sup>

「眼の奥の森」には、『赦す』という言葉が頻出する。盛治は「小夜子、お前を苦しめた者達を、殺してとらすん、我は赦さんど、殺してとらすん」と憤激する。盛治のウチナーグチで語られる第五章は、村の人びとが様々な視点からウチナーグチで心情を話す多声的な世界である。様々な感情を抱えた男同士、女同士、あるいは男と女が相互に声を発することを通じて、島社会の集団内部の相反する力関係が見事に表現されている。<sup>14)</sup>この章のなかでは『殺す』という言葉が三〇回近く使われる。盛治が米兵を殺すのが五回、米兵が盛治を殺すのが一回なのに対して、盛治が村の男たちを殺すというのが二〇回、村の男たちが盛治を殺すのが二回ある。同じ島のウチナンチューがお互いに憎しみ合っていることが分かる。他方、『赦す』という言葉は六回使われるのに対して、その否定形の『赦さない』は七回である。盛治が村の男たちを『赦さない』が四回で最も多く、やはり盛治の憎しみが彼らに強く向けられているのである。ひとたびふるわれた暴力を、人は赦すことができるのか。『赦せない』場合は『殺す』に転じてしまうのか——その葛藤と痛みを六〇年抱えて生きた人びとの記憶が「眼の森の奥」に刻まれているのである。

「眼の森の奥」構成

7	6	5	4	3	2	1
野戦病院に入院しているJの祖父の視点から事件が語られる。一人称の語り。時間設定は事件当時。	沖縄で暮らす小説家の私の許に、Mからビデオレターと銚の切っ先のペンダントが届く。一人称の語り。元編集者のMは東京の大学の友人。Mの知り合いの白人男性Jの祖父は二一歳のとき、沖縄で海兵隊員として戦闘に参加。盛治に銚で刺され、野戦病院に入った。Jは9・11に巻き込まれて死亡。	盲目になった盛治のウチナーグチによる語り。通訳の二世米兵や島の住民たちの声。盛治や厄介者扱いされていることや小夜子が島の男たちに強姦されたことが明かされる。(4の続き) フミと久子と洋一に出会う。	フミが久子と長男洋一に事件を語る。三人称の語り。3の続き。洞窟から出て米兵に捕まった盛治と小夜子のその後のエピソード。	事件の現場にいた島袋久子が松田フミに会うために島に帰る。三人称の語り。久子は高校卒業後、東京で暮らしていた。	市教育委員会の臨時職員の眞喜屋めぐみが、元区長の嘉陽にインタビュー。二人称の語り。村民から白眼視されている嘉陽は「お前」として語られる。	松田フミから盛治へと視点人物が変化しながら事件が語られる。三人称の語り。時間設定は事件当時。

10	沖繩県から顕彰される通知を受けた元米軍通訳兵の二世兵士による語り。書簡のなかで事件当時を回想し、顕彰を断る。
9	沖繩戦の講話をしたタミコ。8の続き。一人称の語り。姉の小夜子を本島南部の病院に見舞う。
8	ロングホームルームで沖繩戦の体験を聴く女子中学生。一人称の語り。彼女は陰湿ないじめに遭っている。

注 「眼の奥の森」の本文は、影書房版（二〇〇九年五月）に拠った。

本作品の素材は、屋我地島に住んでいた目取真の母の記憶がヒントになっている。「対岸の今帰仁から米兵が海を渡ってきて、下着姿で部落の中を歩き回っているのを母は目にしています。彼らは島の女性を狙って泳いできていました。天理教の施設や周辺の民家には、今帰仁からの避難民が住んでいたそうですが、その中のひとりの女性が米兵達に連れ去られます。女性は翌日帰ってきたそうですが、米兵達に一晚中強姦されたのでした」（『沖繩「戦後」ゼロ年』（二〇〇五年七月、NHK出版、五九頁）。

- (1) エマヌエル・リングエルブルム『（新版）ワルシャワ・ゲッター―捕囚一九四〇―四二のノート』（二〇〇六年二月、みすず書房、二二三頁）
- (2) 同右書、『二二四頁。』
- (3) 同右書、一七五頁。
- (4) 同右書、一七九頁。
- (5) 越川芳明「森の洞窟に響け、ウチナーの声」〔小説tripper〕二〇〇九年冬季号、四三四頁
- (6) 目取真俊『沖繩「戦後」ゼロ年』（二〇〇五年七月、NHK出版、六五頁）

(7) 関則雄「◎のシンボル／見ること、触れること、聞くこと―自我と中心感覚の起源について」（『日本芸術療法学会誌 第四二巻第一号、二〇一二年九月、二七頁）。宮本忠雄「太陽と分裂病―ムンクの太陽壁画によせて」（『木村敏編『分裂病の精神病理』3、一九七四年二月）参照。同書には、「中心イマージ」として太陽をとらえる観点から、「黒い太陽」への言及がある。

ここにおいてわれわれは太陽を窮極の「中心イマージ」として措定しようところまできた。この「中心イマージ」としての太陽が分裂病の精神病理において果たす主要な役割についてはさきの第二項で症例をとおして語らせたとおりであるが、いまこれを構造的な推移として図式化しておくなら、病的世界への転回に際して病者自身が中心化の道程をたどると同時に、ネルヴァルの「黒い太陽」に象徴されるような太陽の衰滅ないし死を経験する。これは、シュレーバーによつて見るとおり、みずからが太陽という名の中心に身をおく段階へと移行し、この時点で中心化は完成するが、やがてこの中心点から脱け出すにあたって、ボスの症例にみるような、昇る太陽もしくは太陽の復活を経験する。これは、とりもなおさず、自分がいままで「のりこえ」の不能なまま世界の中心としてふるまってきた境位から、太陽という本来の「中心イマージ」を媒介として中心ならぬ周辺の意識を回復するという脱中心化の過程そのものにほかならない。このようにみても、太陽の体験は世界関連（Weltbezug）の転回の力動を濃厚にふくんでいることになる（同書、二五四頁）。

- (8) 前掲（6）、一七六頁。
- (9) 目取真俊・川村湊・前利潔「座談会／溶解する記憶と記録の境界」（『ギョー』第六号、二〇〇一年二月、一九～二〇頁）
- (10) プリーモ・レーヴィ「アウシュヴィッツは終わらない―あるイタリア人生存者の考察」（竹山博英訳、一九八〇年二月、朝日新聞出版、二四四頁）

- (11) Fritz Bauer: HEUTE ABEND KELLERKLUB, JUNGE LEUTE  
DISKUTIEREN MIT PROMINENTEN 1964, Hessischer Rundfunk,  
Ersausstrahlung 8.12.1964, 20.45 Uhr, im Hessischen Fernsehen III
- (12) 前掲(6) 二八―二九頁。
- (13) 前掲(6) 三六頁。
- (14) 鈴木智之氏によれば、「『盛治』の声を聞くということは、単純に「米軍」の支配に抵抗して、「沖繩」の民衆の意思に寄り添うということではない。同時にそれは、「出来事」の記憶を押し殺し、その〈声〉を封印しようとする「沖繩」に抗うふるまいにならざるをえない」とする。そして「『盛治』が体现している暴力的抵抗を「テロル」と呼び、その規範的な正統性を問いなおすことは、おそらくそれほど難しいことではない。しかし、法的な根拠の有無を問う以前に、その行為を「狂者」のものとして構成するシステムがどのように作動しているのかを問わなければならない」とする(「輻輳する記憶―目取真俊『眼の森の奥』における〈ヴィジョン〉の獲得と〈声〉の回帰」、『社会志林』第五九巻第一号、二〇一二年七月、六三頁)。

【おにし やすみつ 本学教員】